

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02316

研究課題名（和文）戦前期に日本国内（内地）・台湾・朝鮮で使用された漢文教科書に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental study on Kanbun textbooks used in Japan, Taiwan, Korea during pre war period

研究代表者

町 泉寿郎（Machi, Senjuro）

二松學舎大學・文学部・教授

研究者番号：40301733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本の植民地教育については多くの蓄積があるものの、台湾と朝鮮の比較研究が不足していた。そこで、漢文教科書に関して日本国内と台湾と朝鮮の状況を横断的に調査し、漢文教育を通して東アジア諸地域の漢字漢文文化の近代化過程における変遷の様相を描出した。日本・台湾・朝鮮における私塾・書堂・書院などが過渡期の公教育を補完したこと、日本主導の漢文教育によって新しい倫理が説かれて脱儒教が進んだこと、文法教育や新知識の導入においても漢字漢文が有効に機能したことなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代東アジア諸地域における漢文教育をめぐる資料調査とその比較検討からは、日本の近代化が台湾・朝鮮半島の各地域の近代化を一定程度牽引する役割を果たしつつ、各地域の言語・文化的伝統の相違、各地域の政治・社会の動向、各地域間の国際政治動向や文化交流などの諸条件がさまざまに作用して、一国の教育史を追求するだけでは描き切れない多様性が見出された。

研究成果の概要（英文）：Although there has been much accumulation on Japanese colonial education, there has been a lack of comparative research on Taiwan and Korea. Therefore, we conducted a cross-sectional survey of Kanbun education in Japan, Taiwan, and Korea, and through the Kanbun education, we have depicted the aspects of the transition of Chinese characters and Chinese literature culture in East Asian regions during the modernization process. The study revealed that private schools in Japan, Taiwan, and Korea supplemented public education during the transitional period, that the Japanese-led education in Chinese literature taught new ethics and promoted de-Confucianism, and that Chinese characters and Chinese literature functioned effectively in grammar education and in the introduction of new knowledge.

研究分野：漢文学

キーワード：漢文教育 漢文教科書 内地 台湾 朝鮮 総督府 教育制度

1. 研究開始当初の背景

日本国内の教育史研究の歴大な蓄積の中で、漢文教科・漢文教科書に関する研究は比較的手薄である。特に、戦前期(第二次大戦前)は修身・愛国的内容が多く近世近代の日本人作品も多かったが、戦後は戦前期の反省から文学・思想にわたる中国古典が大半を占め、その内容に断絶があるため、戦前期漢文教科書についての着目は不十分であった。

近年、戦前期日本の漢文教科書を研究対象として、加藤國安がその時代的変遷の解説を添えた明治期漢文教科書の資料集を刊行した。合山林太郎は名詩とは何かという観点から、江戸期詞華集から近代漢文教科書に収録された作品を横断的に調査・分類した。金文京は東アジア漢字文化圏の視座から現行の漢文教育を含む日韓・日中の文化比較を行った。

また、戦前期日本の教科書をめぐる対外的問題に関して、植民地教育史研究会(代表:宮脇弘幸、西尾達雄)による戦前期文部省及び台湾総督府・朝鮮総督府等が発行した教科書に関する研究成果がある。しかしながら、植民地教育史研究会では漢文教科書を調査対象としていない憾みが残る。また台湾と韓国それぞれの教育史の研究成果の間に相互参照が十分でない面がある。

戦前期の東アジア全体を俯瞰した漢文教科書に関する研究(教科書・教育制度・組織・人物)は不十分であり、研究上の空白となっていた。

2. 研究の目的

本研究は、戦前期東アジア諸地域で使用された日本製、または日本統治下で編纂された漢文教科書を対象として比較検討するものである。日本国内の漢文教科書・漢文教育の動向に注視しつつ、東アジア諸地域の漢文教科書・漢文教育を多角的に研究することによって、東アジア諸地域の近代化の様相の一端をトレースすることに本研究の目的がある。各地域の各種漢文教科書の内容的相違・経時的変遷等を通して、日本の教育政策・対外政策を明らかにするだけでなく、東アジア諸地域の漢字・漢文文化の相違を明確化し、日本の漢字・漢文文化を相対化する。

研究代表者の所属する二松学舎大学において21世紀COEプログラム「日本漢文学の世界的拠点の構築」(平成16~20年度)、私立大学戦略的研究拠点形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」(平成27年度~令和2年度)を通じて構築した国際的な「漢文」研究の枠組みを活かして、国外研究者との共同体制によって研究を推進し、近代東アジア各地の歴史の相互理解にも資する。

3. 研究の方法

戦前期の日本国内および外地における漢文教育の実施と漢文教科書の編纂出版にあたっては、文部省・内務省や台湾・朝鮮総督府等の関係機関がそれぞれの地域で作りに上げた教育制度のもとで、多くの人物(政治家・官僚・学者・台湾人儒者・朝鮮人儒者)がこれに関与した。そこで、本研究では戦前期の東アジア全体を俯瞰した漢文教科書に関する研究を行うために、日本国内・台湾・韓国・満州・その他(沖縄・横浜等)の地域における、教科書・教育制度・教育に関わる組織・教育に関わった人物に注目して、それぞれの事例について具体的に検討することとした。

各地に所蔵される日本国内で使用された漢文教科書は、二松学舎大学東アジア学術総合研究所と玉川大学教育博物館に所蔵される資料を主な検討材料とした。台湾・朝鮮その他の地域で使用された漢文教科書については、玉川大学教育博物館に所蔵される資料を中心に、国内外の諸機関を調査して、戦前期漢文教科書の発行実態とその内容を明らかにすることとした。

4. 研究成果

日本が行った植民地教育については、日本・台湾・韓国などで既に多くの蓄積があるものの、日本と台湾、日本と朝鮮に限った研究が多く、台湾と朝鮮を横断的に比較した研究が不足していた。本研究はこの問題意識から出発し、漢文教育を中心に台湾と朝鮮の植民地教育の状況を横断的に解明することに意を用いた。

従来の植民地教育研究に伴いがちな民族主義に立脚する否定的評価や、それを裏返しした肯定的評価ではなく、漢文教育と漢文教科書というフレームを通して、東アジア諸地域それぞれの言語・文化伝統を背景とした漢字漢文文化が近代化過程において変遷する様相を描出した。

横断的検討によって、日本における漢学塾や台湾・朝鮮における書堂・書院が過渡期の公教育を補完したこと、修身と漢文の関係では日本主導の漢文教育によって新しい倫理が説かれて脱儒教が進んだこと、文法教育や新知識の導入においても漢字漢文が有効に機能したこと、また1938年に台湾で漢文教育が断絶して以降も朝鮮では漢文教育が継続し両地域に明らかな相違が認められることなどが明らかになった。

本研究の主な成果として、『近代東アジア漢文教育の研究』と題する論文集2冊を刊行した。第1冊にはサブタイトルとして「日本統治下の台湾・朝鮮」、第2冊にはサブタイトルとして「台湾・朝鮮における近代漢文教育の形成」(張三妮氏が二松学舎大学で「博士(日本漢学)」の学位を取得した学位論文を改題改稿したもの)。

第1冊の各部・各章の内容は以下の通りである。

第1部「近代日本の漢文教育」第1章の町泉寿郎「漢文教育の近世・近代 同学と考証学」は、昌平坂学問所・考証学・東京大学に着目して近世後期には正統であった道学と傍流であった考証学が、近代以降はその立場を逆転させて、高等教育には考証学が、中等教育には道学が利用されたと論じた。

第2章の平崎真右「近代日本の教育制度と漢文 国語科との対象から」は、漢文教科の変遷を4期(①1872~1894、1894~1902、1902~1911、1911~1945)に分けてたどり、また漢文科廃止論を取り上げて、「国主漢従」の沿革を明らかにした。

第3章の町泉寿郎「二松学舎の歴史から見る近代漢文教育の変遷」は、明治10年創立の二松学舎(漢学塾 旧制専門学校 新制大学)の歩みを通して、近代日本における漢学をとりまく諸状況を概観した。

第4章の川邊雄大「漢文教科書に見る咸宜園関係者の漢詩文採録について 戦前期と現在を比較して」は、広瀬淡窓以下の咸宜園関係者に着目して漢文教材における日本漢詩文の採録状況を具体化し、戦前・戦後と近年の学習指導要領改訂後の漢文教育の変遷(戦前には多く含まれていた日本人の詩文が戦後は激減し中国人の詩文が中心になってきたこと)を論じた。

第5章の菊地隆雄「昭和期戦前の漢文環境」は、幕末から第二次世界大戦前までの約80年を3世代に分けて、第2世代・第3世代の活動を斯文会の主要人物たちの動向と漢学者の家系に生まれた栗山津禰・中島敦らに着目し、当該期の旧制中学校における漢文の授業風景を活写した。

第2部「台湾における漢文教育」第1章の川邊雄大「外地の「漢文」教科書について 台湾を例として」は、清末・日本統治初期の教育状況から起筆し、日本統治下の台湾の漢文教科書を3期に区分し、日本国内の教科書および朝鮮の漢文教科書と比較して内容の相違点と変遷について論じて、日常生活の実用性を重視する点に台湾の漢文教育の特徴があると結論付けた。

第2章の白柳弘幸「台湾総督府発行『漢文教科書』と漢文科設置」は、日本統治当初に本島人・原住民・日本人にそれぞれ別の教科書による教育が行われていたとした上で、国内の国定教科書と台湾の国語・漢文教科書の発行時期を対照表にして示し、1896年から1937年に至る台湾教育制度と漢文教科の変遷をたどり、伝統的な書房が補完的な意義を担っていたことにも言及して、植民地期台湾の教育実態を明らかにした。

第3章の白柳弘幸「台湾公学校漢文科と本島人教員」は、台湾総督府の植民政策が本島人に対する同化教育を志向しつつも、実情に即して漢文教育を抱え込まざるを得ず、本島人教育のために設置された国語伝習所や公学校においては従来の書房教師の協力が不可欠であったことを、台南県や彰化庁の事例によって明らかにした。

第4章の川邊雄大「戦前期台湾における日本人漢文教師の足蹟 伊藤賢道を例として」は、真宗大谷派の京都尋常中学を経て(東京)帝大漢学科に学んだ伊藤賢道に着目して、明治期の帝大文科(哲学科・漢学科)に学んだ多くの真宗関係者の存在に言及し、卒業後の伊藤賢道が杭州日文学堂における教育活動に次いで、台湾で漢文教科書編纂を含む様々な活動を行ったことを明らかにした。

第3部「朝鮮における漢文教育」第1章の朴暎美「韓国における近代的漢学専門教育機関と支那哲学科 服部宇之吉を中心に」は、京城帝大初代総長となった東京帝大教授服部宇之吉に着目して、植民地朝鮮における中国学研究と儒教教学の形成について論じた。東京帝大の漢学科・支那哲文学科の教官を表示して服部宇之吉の学統・人脈から説き起こし、服部宇之吉が主導的に関与した斯文会から経学院など朝鮮儒林へのさまざまな働きかけや、服部宇之吉が主導して京城帝大支那哲文学科の教官が選任されたことを明らかにした。また大東文化学院に学んだ安寅植が儒教の専門学校を京城帝大に増設することを服部宇之吉に相談し、結局、経学院に明倫学院が設置されることになったことを論じた。

第2章の張三妮・町泉寿郎「日韓併合前後の漢文教育—諸教育令と教科書の内容からの考察」は、普通学校令(1906年)から日韓併合(1910年)後における漢文教育・漢文教科書に着目して、台湾における書堂と同様に朝鮮でも書院に学ぶ生徒を普通学校に誘うために漢文教科が普通学校の科目に加えられたこと、日韓併合を境に普通学校における漢文が「国語(朝鮮語)及漢文」と「日語」から、「朝鮮語及漢文」と「国語(日語)」に転換し、教材に変化が生じ、懸吐の使用など教え方も変化したことを論じた。

第3章の朴暎美「1930年『新編高等朝鮮語及漢文読本』の改訂要望件 について」は、1911年の第一次朝鮮教育令から1919年の三・一運動を経て1922年の第二次朝鮮教育令に至って普通学校・高等普通学校等の修学年限が延長されたが、「朝鮮語及漢文」と「国語及漢文」の教科書の要旨は大きく変化しなかったとし、第二次朝鮮教育令後の編纂にかかる『新編高等朝鮮語及漢文読本』に対して起こった批判は韓国漢文教育の近代化を考えるうえで示唆的内容を含むと論じた。

第4部「台湾・朝鮮以外の地域における漢文教育の諸問題」第1章の張三妮「伊沢修二の清末中国教育に関する言説と出版活動」は、清末教育改革の従事者(羅振玉・呉汝綸・黄紹箕ら)と伊沢修二との交流や伊沢修二と東亜同文会との関係について言及し、伊沢修二が編纂に関与した各種の中国向け教科書を取り上げてその清末文字改革との関連について論じた。

第2章の中村聡「日本横浜大同学校 その創立年月日をめぐって」は、従来その設立年代に諸説(1896年から1899年まで)ある横浜初の華僑学校である大同学校の設立状況について、孫文ら革命派に近い陳少白によって設立準備され、陳が康有為・梁啓超ら改良派に教員派遣を要請して開校したが、間もなく改良派が主導権を握ったことを明らかにし、華僑たちが洋学に基礎を置

く革命派より伝統的学問を積んだ改良派に親和性が高かったと論じた。

第3章の張三妮「横浜大同学校における国文教科書編纂」は、最初の華僑学校の教科書とされる大同学校教科書について、同時期の日本国内における「国語科」形成に影響をうけていることを、大同学校編纂の『幼稚新読本』『小学新読本』を例に挙げて論じた。

以上、近代東アジア諸地域における漢文教育をめぐる諸問題には、日本の近代化が各地域の近代化を一定程度牽引する役割を果たしつつ、各地域の言語・文化的伝統の相違、各地域の政治・社会の動向、各地域間の国際政治動向や文化交流などの諸条件がさまざまに作用して、一国の教育史を追求するだけでは描き切れない多様性が見出された。

第2冊の各部・各章の内容は以下の通りである。

序章：日本近代の漢文教育に使用された漢文教科書は、言語教育の素材であると同時に、同時代の文化・歴史・思想を反映する材料でもあり、台湾と朝鮮では言語文化の面で異質性を持ちつつも、日本統治下における漢字漢文として共通性をもつ。従来の植民地教育に関する語りが異民族支配に対する否定的語りか、近代化を促進したという肯定的な語りかの何れかになりがちであり、韓国では前者が、台湾では後者が多くなる傾向があることを指摘し、従来欠如している台湾と韓国を比較横断的に論ずることの必要性を述べた。

本論の第1部では台湾、第2部では朝鮮について論じている。各部ともに第1章は教育制度・教育法令とその変遷について論じ、第2章・第3章は各地域・各時期の漢文教科書と漢文教育に関与した主な植民地官僚について論じた。

第1部、第1章「日本統治と台湾近代教育の形成 諸教育令の策定と教育課程を中心に」

第1節「明治政府の教育政策」では、日本国内における漢文教育について、修身教科との関係、私塾など教育組織の問題、国語教科形成との関係等の視点から概説し、伝統的な前近代の儒教教育を否定し新たに道德教育・国民教育と知識技術教育がめざされたこと、公立学校未発達に漢学塾などがそれを補完する意義をもったこと、具体的な教育課程への位置づけでは国語教科の形成と道德教育への要求の間で揺れ動いたこと等を論じた。

第2節「日本統治と台湾教育政策の形成」では、まず日本の台湾統治における教育法令について、台湾民衆を対象とする初の教育法令である1919年台湾教育令(1922年改正)と、その公布以前の現地民を対象とした教育機関(国語伝習所・公学校)について解説し、公学校の教育内容を紹介し、漢字漢文が日本語を理解させる道具として使用されていたこと、日本・朝鮮と異なり手紙・書類の書き方など実用的な教材を収録していることを指摘した。一方で、公学校未整備により、民間の書房が長期にわたって公学校を補完する意義を担っており、漸次教育内容を近代化しつつ伝統教育が存続したことを明らかにした。

第2章「植民地台湾における漢文教育の創始とその確立 「同文」の意義と漢文の境界」

第1節「教育課程に取り入れた漢文及び漢文教科書」では、台湾統治初期の国語伝習所や公学校の状況として、日本語を理解させる道具として漢字漢文を利用しつつ、入学者確保の便法としての伝統的漢籍を利用したことを明らかにした。しかし漢文と日本語を併用して儒教と国体論を折衷する「混和主義」教育は矛盾を内包したため、漢文は儒教要素を払拭した実用的な内容となって後退し、言語ナショナリズムに基づく日本語教育論が現れると論じた。

第2節「『台湾教科用書漢文読本』(1905~06)の性格 言語教育の側面から」では、台湾植民教育に従事した主要人物を取り上げて、その言語教育観を論ずる。初代学務部長伊沢修二の「同文主義」に変遷があることを指摘し、台湾の現状に触れた伊沢が漢字の表意性を利用して日本語教育に利用することを提唱して生徒誘致のために伝統的儒教經典を採用したが、その「混和主義」は矛盾をはらんでいたと論ずる。次に、伊沢の「混和主義」を否定する意見として、橋本武と平井又八による1900年の論争を取り上げ、橋本が日本語教育自体のもつ修身的機能を重視し、漢文による道德教化の併用を否定して漢文を一種の技術教育に抑制すべきであると主張したことを紹介しつつ、橋本の主張が台湾の現状から乖離していたため、後藤新平は現地民の要望を反映して漢文科を独立させた。また、本田茂吉「漢文教授法研究談」(1901年12月)と鈴江国吉「漢文授業例」(1902年12月/1903年1月)を紹介し、伝統的漢文教育から脱却して、理論的・体系的に漢文を教えたところに、台湾の語文教育における日本統治下の漢文教育がもつ歴史的意義があったと結論した。

第3節「植民地台湾における漢文教育の機能と限界」では、初等教育における漢文教科書教材の推移、師範教育におけるカリキュラムと漢文教科書教材の推移を通して、台湾漢文教育の沿革を描出する。はじめ漢文教育は「同化」の道具として利用されていたが、大正期に日本語教育が浸透して漢文教育が削減され、植民地統治イデオロギーを反映したものへと変わっていく。昭和初期には、白話文運動に連動して閩南語使用や漢文学習復活の要求が起こり、民族運動の主張に漢文が利用されることになったと論じた。

第2部、第1章「旧韓末漢文教育の展開 日本人学務官僚と近代的漢文教育の創始」

第1節「官公立学校漢文教育と日本人学務官僚」では、三次の日韓協約によって日本が教育行政権を把握した統監府時代(1906~10)を中心に、朝鮮植民教育の沿革とそれを担当した日本人学務官僚(幣原坦、三土忠造、隈本繁吉ら)について概観した。次に、各種の教育法令を通して、漢文は国語(朝鮮語)との関係を薄めながら教授されていたものが、日韓併合を経て漢文は国語(日本語)との関係を保つべきものに逆転したと指摘した。

第2節「三土忠造と学部編纂漢文教科書 教科書の編纂理念を中心に」では、三土忠造による

カリキュラム編成と教科書編纂について論じ、三土自身は初等教育に漢文を入れるべきではないとの主張にもかかわらず、生徒獲得の方便として漢文が採用されていたと指摘した。三土が編纂に関与した教科書は全教科に道徳的内容が盛り込まれ、漢文教科書にも儒教道徳ではない近代的修身道徳が盛り込まれた。官立公学校で使用された教科書は文法解説など科学的な言語教育に配慮したものとなり、近代性と実用性を備えた漢文教育がスタートしたと論じた。

第3節「教科書検定制度と漢文教科書」では、民間教科書が盛行するなか、教科書検定制度の導入によって、反体制的内容を取締るだけでなく、内容面では経書の教材が縮小され韓国漢文を含む文学教材が増加したが、結果的に韓国側の自発的発展が挫折したと論じた。その中において、魚允迪編纂の『懸吐具解監本孟子』等を朝鮮人の手になる見るべき編纂教科用図書と評した。

第2章「日本統治と植民地朝鮮における漢文教育の推移」

第1節「第一次朝鮮教育令期の漢文教育 植民地政策の展開と漢文教育」では、第一次朝鮮教育令期の植民地政策と漢文教育の関係について、朝鮮教育令策定に関与した隈本繁吉や、「朝鮮教育方針」立案に関与した三土忠造らの意見を中心に取り上げ、朝鮮教育令策定段階では漢文削減の意見が多く、民衆統治の便法として儒教を利用するという意見が多く、併合後には漢籍に加えて日本漢文・朝鮮漢文の教材が増加したことを明らかにした。また漢文教科書が道徳教育や朝鮮地理歴史の教育の性格も担ったため、伝統教育では排除された「吐」が解釈標準化のために導入されたこと、またこのことが諺文綴字法など韓国語表記法の法規定を促進したと論じた。

第2節「朝鮮語科教育課程と漢文教科書の推移」では、第一次朝鮮教育令下では国語(日本語)教育が強化されていたが、1919年三・一独立運動後の1922年第二次朝鮮教育令では対朝鮮懐柔政策が見られ、これを反映して文学教材が増加し、高等普通学校では「国語及漢文」と「朝鮮語及漢文」の教科に変更される。中等学校における教科「朝鮮語及漢文」では、国民道徳涵養を基本としつつ、実業を説いた漢文・朝鮮漢文・朝鮮語文をも加えて朝鮮志向の内容となった。1938年第三次朝鮮教育令では国家主義が強まり、朝鮮語は完全に排除されたことを明らかにした。

第3節「国語科漢文教科書に関する検討」では、1922年から1938年まで総督府が採った「内地準拠主義」に基づき、朝鮮で使用された国語科漢文教科書と同時期の国内漢文教科書との相互関係を検討し、朝鮮時代の最高学府成均館が併合後に経学院に改組され、1920年代には日本の斯文会との間に交流があり、塩谷温や服部宇之吉の編纂した漢文教科書からの影響に言及し、文化統治時代の文教政策下の漢文教科が脱儒教の革新的な性格をもったと結論した。

終章では、日本統治下の台湾・朝鮮における漢文教育には政治的要素と教育的要素の二重構造が見いだせること、また台湾と朝鮮が異なる言語環境であるにも拘らず、いずれの植民地統治においても漢字文化圏の文化伝統を反映して漢文教育が不可避であったと指摘し、日本の植民地統治は多くの矛盾・限界を抱えていたが、日本主導の漢文教育は脱儒教をもたらした点で共通し、台湾では日本語教科書と漢文教科書が近代知識を紹介する媒体として機能し、同化教育と母語教育の二重構造のなかで漢文教育が漢文リテラシーを保証することになったと結論付けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計29件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 90
2. 論文標題 湯島聖堂と漢学の近世近代	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 懐徳 / 懐徳堂記念会	6. 最初と最後の頁 08-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 1
2. 論文標題 三島中洲と漢学塾二松学舎から見た東アジアの近代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「南岳百年祭」記念論文集 / 関西大学東西学術研究所	6. 最初と最後の頁 01-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 1
2. 論文標題 野田の観桃をめぐる詩文-佐藤元菘・大沼枕山・宮本鴨北・渋沢栄一等と造醬家茂木氏 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 菊を採る東籬の下 : 石川忠久先生星寿記念論文集	6. 最初と最後の頁 525-546
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村聡	4. 巻 15
2. 論文標題 玉川大学蔵『聖經典林』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村聡	4. 巻 220
2. 論文標題 中村敬宇のキリスト教理解	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋研究 / 大東文化大学東洋研究所	6. 最初と最後の頁 31-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白柳弘幸	4. 巻 24
2. 論文標題 台湾の高齢者の方々はなぜ日本語を話せるのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 植民地教育史研究年報 / 日本植民地教育史研究会運営委員会	6. 最初と最後の頁 146-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白柳弘幸	4. 巻 18
2. 論文標題 槻木瑞生氏寄贈「満洲教科書」・「満洲の教科書」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 玉川大学教育博物館紀要	6. 最初と最後の頁 09-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川邊雄大	4. 巻 39
2. 論文標題 琉球国内務省出張所往復書藩庁往復並応接記綴込 (後)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大谷大学真宗総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 79-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川邊雄大	4. 巻 1
2. 論文標題 明治三十年代における東本願寺の中国布教および教育活動について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代東アジアと日本文化 / 堺 : 銀河書籍	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地隆雄	4. 巻 1
2. 論文標題 鄭孝胥執務室から見た「満洲」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 菊を採る東籬の下 : 石川忠久先生星寿記念論文集	6. 最初と最後の頁 613-630
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張三 (女+尼)	4. 巻 35
2. 論文標題 旧韓末学部編纂『漢文読本』の編纂理念と三土忠造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学院紀要『二松』	6. 最初と最後の頁 135-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張三 (女+尼)	4. 巻 1
2. 論文標題 植民地台湾・朝鮮漢文教育形成過程の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 博士論文	6. 最初と最後の頁 001-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 2
2. 論文標題 二松学舎の漢学教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 222-237
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 2
2. 論文標題 地方の漢学塾 新潟地方を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 156-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 4
2. 論文標題 昌平坂学問所 寛政三博士の時代から文久三博士の時代へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 8-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 4
2. 論文標題 島田重礼と考証学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 24-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 4
2. 論文標題 東京大学と古典講習科	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 42-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町泉寿郎	4. 巻 5
2. 論文標題 高等教育と漢学・漢文	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 90-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川邊雄大	4. 巻 4
2. 論文標題 外地の「漢文」教科書について 台湾を例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 158-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川邊雄大	4. 巻 4
2. 論文標題 国土館の漢学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 229-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川邊雄大	4. 巻 1
2. 論文標題 戦前期台湾の漢文教科書について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本漢文学の射程 その方法、達成と可能性	6. 最初と最後の頁 122-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本雅也	4. 巻 5
2. 論文標題 文検漢文科」の研究 三度の実施科目名の変遷とその背景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 112-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地隆雄	4. 巻 5
2. 論文標題 昭和期戦前の漢文環境	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 214-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川邊雄大	4. 巻 9
2. 論文標題 漢文教科書に見る咸宜園関係者の漢詩文採録について 戦前期と現在を比較して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 咸宜園教育研究センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張三尼・町泉寿郎	4. 巻 4
2. 論文標題 日韓併合前後の漢文教育 - 諸教育令と教科書の内容からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講座近代日本と漢学	6. 最初と最後の頁 178-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張三尼	4. 巻 34
2. 論文標題 一八九四―一九一〇韓国漢文教育と日本一初学教科書を中心に一	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 二松	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白柳弘幸	4. 巻 17
2. 論文標題 植民地統治台湾草創期の初等教育 漢文教育と本島人教員	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 玉川大学教育博物館紀要	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白柳弘幸	4. 巻 21
2. 論文標題 台南州における内台共学 台南南門尋常小学校を中心にして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 植民地教育史研究年報	6. 最初と最後の頁 48-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白柳弘幸	4. 巻 22
2. 論文標題 台湾教育史遺構調査(その11) 公学校の母体とそのなった宗教施設	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 植民地教育史研究年報	6. 最初と最後の頁 252-259
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 川邊雄大
2. 発表標題 1.川邊雄大、戦前期東アジアにおける漢文教科書について 台湾・朝鮮を例として
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会第10回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川邊雄大
2. 発表標題 漢文教科書に採録された 咸宜園関係者の漢詩文について
3. 学会等名 淡窓研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川邊雄大
2. 発表標題 戦前期台湾公学校の漢文教科書について その内容と特徴
3. 学会等名 中国語文学会第163回定例学術研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 大沼鶴林・楠莊三郎による枕山の文学の継承と顕彰
3. 学会等名 シンポジウム枕山と荷風 江戸の漢文学は近代に何をもたらしたのか
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川邊雄大
2. 発表標題 戦前期台湾公学校の漢文教科書
3. 学会等名 国際ワークショップ「日本漢文学の射程」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 合山林太郎
2. 発表標題 近代日本における漢詩についての教養のあり方とその位置づけ
3. 学会等名 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本雅也
2. 発表標題 文検漢文科からみる漢文教育の概観
3. 学会等名 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川邊雄大
2. 発表標題 戦前期台湾における日本人教師の漢学的素養 伊藤賢道を例として
3. 学会等名 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白柳弘幸
2. 発表標題 日本植民地統治下台湾における漢文教師 - 明治期の彰化公学校を中心にして -
3. 学会等名 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朴暎美
2. 発表標題 '日帝強占期'朝鮮における漢文教育
3. 学会等名 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 張三尼
2. 発表標題 「関東州」における中国人用教科書の編纂事情と教材採録
3. 学会等名 二松学舎大学第118回人文学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 白柳弘幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 75
3. 書名 戦時下台湾の少女少女 / 植民地教育史ブックレット	

1. 著者名 町泉寿郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 413
3. 書名 レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学 旧蔵目録と研究	

1. 著者名 清水信子・川邊雄大・町泉寿郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学センター	5. 総ページ数 92
3. 書名 加藤天淵関係資料目録（稿）	

1. 著者名 江藤茂博・町泉寿郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 291
3. 書名 (講座近代日本と漢学) 漢学と漢学塾	

1. 著者名 牧角悦子・町泉寿郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 250
3. 書名 (講座近代日本と漢学) 漢学と学芸	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中村 聡 (nakamura satoshi) (80352722)	二松學舎大學・文学部・その他 (32664)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Reconsidering Japanese Kanbun: A Workshop for the Critical Analysis Literacy Sinitic in Japan	開催年 2018年~2018年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------